



褒美と罰

ほめ方・認め方や叱り方は、家庭によって様々です。どれが正解かというのは、永遠のテーマなのかもしれません。冷静に子供に言い聞かせる親もいれば、大声で怒鳴りつける親もいます。中には褒美や罰を与える親もいます。しかし、褒美や罰が子供たちの成長にとって有効な方法であるのかは眉唾物です。例えば「テストで成績上がったならゲームを買ってあげる。」「お手伝いしたら、お小遣いあげる。」など褒美をあげる親は、少なくないようです。しかし、「行為に報いる」はずの褒美が「褒美をもらうために」勉強したり手伝いしたりするようになれば、本末転倒です。褒美が動機付けになり、「自分の役割を果たすこと」や「協力すること」などの行為自体の価値が見失われてしまうからです。元々人間には、「学びたい」「もっといい自分になりたい」という気持ちがあります。褒美を与えられなくても、自分の役割や責任を果たすこと自体に意義を感じて、進んで勉強したり手伝いしたりすることが望ましい姿と言えます。お互いに感謝や共感の気持ちがあり、それを伝え合うことで、行動や努力やそれらの結果そのものが、喜びや達成感を味わわせ、自己有用感や充実感へと結びつくのです。



一方罰はどうでしょうか。子供がルールに違反したり、物を壊したり、友達に意地悪をしたりすると、叱る他に罰を与えることがあります。ベランダに放り出す、押し入れに閉じ込めるなど、罰にはいろいろあります。罰の内容は普通、罰の原因となる子供の行動とは直接の関係のないものであり、大人が恣意的に決める内容です。一昔前の学校で例えるならば、「朝遅刻したら、運動場を5周走る」「宿題を忘れたら教室の掃除をする」という罰は、「遅刻・走る」「宿題・掃除」ということとの間に、必然的・合理的な関係はありません。しかし、「遅刻したならばその原因を考え、具体的な行動目標を立てる」「宿題を忘れたならば、それを昼休みか放課後にする」という原状回復のための行為であるならば、罰とは言えません。

罰は大人基準であり、罰の効果は一時的なものとしか言えないでしょう。それは、子供の納得を得ていないからです。また、「愛の鞭=罰」という躰けの名目で大人が子供を「叩く」ことを聞くことがあります。例えばサーカスでライオンを手懐けるために、鞭を使う場面を想像してみてください。確かに鞭を使ってライオンを調教しています。しかし、鞭を使った後は「餌」を与えています。だから「愛の鞭=褒美」ですので、「愛の鞭=罰」という考え方は、成立しなくなります。



学校では、自己有用感の育成をテーマに取り組んでいるところです。子供たちが「心のパズル」でどんな心の成長を実感したのか、また周りから、「心のパズル」という共通の評価ツールで成長を認めてもらうことで、「人の役に立つことができる」「自分なりの貢献ができる」という気持ちも高まってきます。そうすると、帯西レンジャーとともに子供たちが活躍し、学校や家庭がよりよいものとなっていくと思います。